

私の個人主義

夏目漱石



——大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述

私は今日初めてこの学習院というものの中に這入りました。もつとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違ありませんが、はつきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹介かたがたちよつとお話になつた通りこの春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差支があつて、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記憶と見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありました。とにかくひとまずお断りを致さなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じ

まして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺うかがいましたら、此年ことしの十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰くつてみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゅうございますとはつきりお受合うけあ申したのであります。ところが幸か不幸か病氣かに罹かりまして、九月いっばい床とこについておりますうちにお約束やくそくの十月が参りました。十月にはもう臥ふせつてはおりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちよつとむずかしかつたのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云いつて来られるだろう来られるだろうと思つて、内々ないないは怖こわがつていました。

そのうちひよろひよろもついに癒なつてしまつたけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰さたもなく打ち過ぎました。私は無論病気の事をご通知はしておきませんでした。二三日の新聞にちよつと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察せられて、誰だれかが私の代りに講演をやつて下さつたのだらうと推測して安心し出しました。ところへまた岡田さんがまた突然見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿はいて見えたのであります。(もつとも雨の降る日であつたからでもありません) しょうが、そう云つた身拵みごしらえで、早稲田わせだの奥おくまで来て下さつて、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃のがれたように考えていたものですから実は少々驚おどろきました。しかしまだ一カ月も余裕よゆうがあるから、その間にどうかなるだらう

と思つて、よろしゅうございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの間に、何か纏まとつたお話をすべき時間はいくらでも拵もてえられるのですが、どうも少し気分が悪くつて、そんな事を考えるのが面倒めんどうでたまらなくなりました。そこでまあ十一月二十五日が来るまでは構かまうまいという横着りようけんな料簡おこを起して、ずるずるべつたりべつたりにその日その日を送つていたのです。いよいよと時日が逼せまつた二三日前になつて、何か考えなければならぬという気が少ししたので、やはり考えるのが不愉快ふゆかいなので、とうとう絵を描かいて暮くらしてしまいました。絵を描くというとかかえらいものが描けるように聞きえるかも知れませんが、実は他愛もないものを描いて、それを壁かべに貼はりつけて一人で二日も三日もぼんやり眺ながめているだけなのです。昨日でした

かある人が来て、この絵は大変面白い——いや面白いと云つたのではありません、面白い気分の時に描いた画えらしく見えると云つてくれたのでした。それから私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描いたのだと云つて私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中には愉快でじつとしていられない結果を画にしたり、書にしたり、または文こころもちにしたりする人があ
る通り、不愉快だから、どうかして好い心持こころもちになりたいと思つて、筆を執とつて画なり文章なりを作る人もあります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現われたところを見る
とよく一致いっちしている場合が起るのです。しかしこれはほんのついでに申し上あげる事で、話の筋に關係した問題でもありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な画を眺めるだけで、講演の内容をちつとも組み立てずに暮らしてしまつた

のです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否いやでも応おこでもここへ顔を出さなければすまない事になりました。それで今朝けさ少し考かんがえを纏まとめてみました。が、準備がどうも不足のようです。とてもご満足まんぞくの行くようなお話はできかねますから、そのつもりでしんぼうご辛防しんぼうを願ねがいます。

この会はいつごろから始まつて今日まで続いているのか存ぞんじませんが、そのつどあなたがたがよその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫ごうも不都合ふごうでないと私も認まめているのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望きぼうするような面白い講演は、いくらどこからどんな人を引張ひっぱつて来ても容易やすに聞かれるものではなからうとも思うのです。あなたにはただよその人が珍めずらしく見えるのではあります。

いか。

私が落語家はなしかから聞いた話の中にこんな諷刺ふうしてき的のがあります。

——昔むかしあるお大名ふたりが二人目黒辺たかがりへ鷹狩たかがりに行つて、所々方々を

馳かけ廻まわつた末、大変空腹はなになつたが、あいにく弁当ばんばんの用意よういもな

し、家来けらいとも離はなれ離はなれになつて口腹くふくを充みたす糧かてを受けうける事がで

きず、仕方なしに二人はそこにある汚きたない百姓家ひやくしやうやへ馳かけ込んで、

何でも好よいから食くわせろと云いつたそうです。するとその農家のうかの

爺じいさんと婆ばあさんが氣きの毒どくがつて、ありあわせの秋刀魚あきまを炙あぶつて

二人の大名だいめいに麦飯むぎいを勧めすすめたと云いいます。二人はその秋刀魚あきまを肴さかな

に非常ひじょうに旨うまく飯いを済すまして、そこを立出たちいたが、翌日あしたになつても

昨日きのうの秋刀魚あきまの香かおりがふんぷん鼻はなを衝つくといつた始末はじまつで、どうし

てもその味あじを忘われる事ができきないのです。それで二人のうちうちの

一人ひとりが他ほかを招待しょうたいして、秋刀魚あきまのご馳走ちそうをする事ことになりました。

その旨を承わつて驚ろいたのは家来です。しかし主命ですから反抗する訳にも行きませんので、料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛拔で一本一本抜かして、それを味淋か何かに漬けたのを、ほどよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食う方は腹も減つていず、また馬鹿丁寧な料理方で秋刀魚の味を失つた妙な肴を箸で突つついてみたところで、ちつとも旨くないのです。そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発したと云うのが話の落になつているので、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接している諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待ってもお聞きになろうというのは、ちようど大牢の美味に飽いた結果、目黒の秋刀魚がちよつと味わつてみたくなつたのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近頃ちかごろの生徒は自分の講義をよく聴きかないで困る、どうも真面目まじめが足りないで不都合ふつごうだというような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶していますが、何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返していうのもお恥はずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどこの国にいるものかと申したのです。もともと私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんが、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩どうねんばい、もしくはもう少し大きくなった時代、には、今のあなたがたよ

りよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云つても好いくらいのものでした。もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、けんがい圏外にいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私からふり返つてみると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私はうわべ上部だけは温順らしく見えながら、けつして講義などに耳を傾ける性質ではありませんでした。始終なま怠けてのらくらしていました。その記憶をもつて、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃するこうげき勇氣が出て来ないのです。そう云つた意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大森君にあや詫まるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついでだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外それてしまいましたから、再び元へ引き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入つて、立派な先生から始終指導を受けていらつしやる、またその方々の専門的もしくは一般いっほんてき的の講義を毎日聞いていらつしやる。それだのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちようど先刻お話したお大名が目黒の秋刀魚を賞しょうがん翫したようなもので、つまりは珍らしいから、一口食つてみようという料簡じゃないかと推察されるのです。實際をいうと、私のよくなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらつしやる常雇じょうやうといの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かるうとも思われるのです。たとい私にしたところで、もしこの学校の教授にでもなつていたならば、単に新らしい刺戟しげきのないと

いうだけでも、このくらいの人数が集つて私の講演をお聴きになる熱心なり好奇心こうきしんなりは起るまいと考えるのですがどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかというのと、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうとした事があるのです。もつとも自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦すいせんしてくれたのです。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていいか知らなかつたほどの迂濶者うかつものでしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懐手ふところをして待つていたって、下宿料が入つて来る訳でもないのです、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜り込むもぐこ必要があつたので、ついこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人

は私に向つてしきりに大丈夫らしい事をいふので、私の方でも、もう任命されたような気分になつて、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊いてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを誂らえてしまつたのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかつたのだから、すこぶる変なものです。さていよいよモーニングが出来上つてみると、あに計らんやせつかく頼みにしていた学習院の方は落第と事がきまつたのです。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になりました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。別段悔しくも何ともなかつたからでしょう。何でも米国帰りの人とか聞いていました。——それで、もしその時にその米国帰りの人が採用されずに、この

私がまぐれ当りに学習院の教師になって、しかも今日まで永続していたなら、こうした鄭重ていちょうなお招きを受けて、高い所からあなたに話をする機会もついに来なかつたかも知れまますまい。それをこの春から十一月までも待つて聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍らしがられている証しょうこ拠ではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々申上もうしあげようと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よりも、今日の講演に必要な部分だからと思つて聴いていただきたいのです。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持つていなかつたのだから仕方

がありません。そのモーニングを着てどこへ行つたと思ひますか？ その時分は今と違つて就職の途は大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払底なためだったのでしよう。私のようなものでも高等学校と、高等師範からほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へ周旋してくれた先輩に半分承諾を与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶をしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不行届がちで、とうとう自分に祟つて来たと思えば仕方がありませんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こつちへ来るよ
うな事を云いながら、他にも相談をされては、仲に立つた私が困ると云つて譴責されました。私は年の若い上に、馬鹿の肝癩持

ですから、いつそ双方とも断つてしまつたら好いだらうと考え
て、その手続きをやり始めたのです。するとある日当時の高等
学校長、今ではたしか京都の理科大学長をしている久原さんか
ら、ちよつと学校まで来てくれという通知があつたので、さつそ
く出かけてみると、その座に高等師範の校長嘉納治五郎さんと、
それに私を周旋してくれた例の先輩がいて、相談はきまつた、
こつちに遠慮えんりよは要いらないから高等師範の方へ行つたら好かろう
という忠告です。私は行いきがかり上い否やだとは云えませんが承諾
の旨を答えました。が腹はらの中では厄介やっかいな事になつてしまつたと
思わざるを得なかつたのです。というものは今考えるところもつた
いない話ですが、私は高等師範などをそれほどありがたく思つ
ていなかつたのです。嘉納さんに始めて会つた時も、そうあな
たのように教育者として学生の模範もはんになれというような注文だ

と、私にはとても勤まりかねるからと逡巡しゆんじゆんしたくらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断わられると、私はますますあなたに来ていただきたくなつたと云つて、私を離さなかつたのです。こういう訳で、未熟な私は双方の学校を懸持かけもちしようなどという慾張根性は更さらになかつたにかかわらず、関係者に要らざる手数をかけた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました。

しかし教育者として偉えらくなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈きゆうくつで恐れ入りました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云つたくらいですから、あるいはもつと横着をきめていてもよかつたのかも知れませんが。しかしどうあつても私には不向ふむきな所だとしか思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はま

あ肴屋が菓子家へ手伝いに行つたようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。あなたがたは松山の中学と聞いてお笑いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になつたのでしよう。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもつてゐる人があるが、あれはいつたい誰の事だと私はその時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時その中学に文学士と云つたら私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々実在のものとして認めるならば、赤シャツはすなわちこういう私の事にならなければならぬので、——はなはだありがたい仕合せと申上げたいような訳になります。

松山にもたつた一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が留めてくれましたが、もう先方と内約ができていたので、と

うとう断つてそこを立ちました。そうして今度は熊本の高等学校に腰こしを据すえました。こういう順序で中学から高等学校、高等学校から大学と順々に私は教えて来た経験をもつていますが、ただ小学校と女学校だけはまだ足を入れた試ためしがございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあつたのは、熊本へ行つてから何年目になりましたようか。私はその時留学を断ことわろうかと思ひました。それは私のようなものが、何の目的ももたずに、外国へ行つたからと云つて、別に国家のために役に立つ訳もなからうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取次とりついでくれた教頭が、それは先方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行つた方が好かろうと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しか

し果せるかな何もする事がないのです。^{はた}

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならん事になります。そのお話がすなわち今日の講演の一部分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかとお尋ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中むちゆうだったので。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作つて、冠詞かんしが落ちていると云つて叱しかられたり、発音が間違つていると怒おこられましたりしました。試験にはウォーズウオースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフォリオは幾通りあるかとか、あ

るいはスコットの書いた作物を年代順に並べてみるとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうだかという事が。英文学はしばらく措いて第一文学とはどういうものだか、これではとうてい解るはずがありません。それなら自力でそれを窮め得るかとうと云うと、まあ盲目の垣覗きといったようなもので、図書館に入つて、どこをどううろついても手掛がないのです。これは自力の足りないばかりでなくその道に關した書物も乏しかつたのだらうと思います。とにかく三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶は第一ここに根ざしていと申し上げても差支ないでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたというより教師にされてしまったのです。幸に語学の方は怪

しいにせよ、どうかこうかお茶を濁にごして行かれるから、その日その日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚くうきよでした。空虚ならいつそ思い切りがよかつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然ぼくぜんたるものが、至る所に潜ひそんでい
るようで堪たまらないのです。しかも一方では自分の職業として
いる教師というものに少しの興味ももち得ないのです。教育者
であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていま
したが、ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なのだから仕
方がありません。私は始終中腰で隙すきがあつたら、自分の本領へ
飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本
領というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い
切つてやつと飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何

をして好いか少しも見当がつかない。私はちようど霧きりの中に閉じ込められた孤独こどくの人間のように立ち竦すくんでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射さして来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用いてたった一条ひとすじで好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうつとしているのです。あたかも囊ふくろの中に詰つまめられて出る事のできな
い人のような気持がするのです。私は私の手にただ一本きりの錐きりさえあればどこか一カ所突き破やぶって見せるのだがと、焦燥あせり抜ぬいたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹はらの底ではこの先自分は
どうなるだろうと思つて、人知れず陰鬱いんうつな日を送つたのであります。

私はこうした不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、また同様の不安を胸の底に畳んでついに外国まで渡ったのであります。しかしいつたん外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまつています。それで私はできるだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見つかりそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるよりほかに、私を救う途はないのだ

と悟さとつたのです。今までは全く他人本位で、根のない萍うきぐさのように、そこいらをでたらめに漂ただよつていたから、駄目だめであつたという事によろやく気がついたので。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらつて、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまふいわゆる人真似ひとまねを指すのです。一口にこう云つてしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審ふしんがられるかも知れませんが、事實はけつしてそうではないのです。近頃流行はやるベルグソンでもオイケンでもみんな向むこうの人がとやかくいうので日本人もその尻馬しりうまに乗つて騒さわぐのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲従もうじゆうして威張いばつたものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴ふいちようして得意がった男が比々ひと皆是みなこれなりと云いたいくらいごろしていました。他の悪口で

はありません。こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲こうという同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の腑ふに落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触ふれ散らかすのです。つまり鵜呑うのみと云つてもよし、また機械的の知識と云つてもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われない、よそよそしいものを我物顔わがものがおにしやべつて歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞ほめるのです。

けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着くじやくをして威張くっているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀くじやくの羽根を身に着けて威張くっているようなものですから。それでももう少し浮華ふかを去かつて摯実しじつにつかなければ、自分の腹の中はいつまで経たつたつて安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いか云つても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならない事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい受売うけうりをすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、けつして英国人の奴婢どひでない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具そなえていなければならぬ上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところと私の考かんがえと矛盾むじゆんしてはどうも普通ふつうの場合気が引ける事になる。そこでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなければならぬ。風俗、人情、習慣、溯さかのぼつては国民の性格皆この矛盾の原因になつてゐるに相違ない。それを、普通の

学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に気に入るものはきつと乙おつの国民の賞讃を得るにきまつている、そうした必然性が含まふくれてしていると誤認してかかる。そこが間違つてしていると云わなければならぬ。たといこの矛盾を融和ゆうわする事が不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇ぶんだんには一道の光明を投げ与あたえる事ができる。——こう私はその時始めて悟つたのでした。はなはだ遅おそまきの話で慚愧ざんきの至いたりでありますけれども、事実だから偽いつわらないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己りつきやくちの立脚地かたを堅めるため、堅めるといふより新らしく建設するために、文芸とは全く縁えんのない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研

究やら哲学的てつがくてきの思索しさくに耽ふけり出したのであります。今は時勢が違ちがいますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられてゐるはずですが、その頃は私が幼稚ようちな上に、世間がまだそれほど進んでいなかったので、私のやり方は實際やむをえなかつたのです。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握にぎつてから大変強こわくなりました。彼かれら何者ぞやと氣慨きがが出ました。今まで茫然ぼうぜんと自失じしつしていた私に、ここに立つて、この道からこう行かなければならないと指図さしずをしてくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。

自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗つて空騒ぎをしてゐるようでははなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらない

でも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思つて、著書その他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯しょうがいの事業としようと考へたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもつて陰鬱いんうつな倫敦を眺めたのです。比喻ひゆで申すと、私は多年の間懊惱おうれうした結果ようやく自分の鶴嘴つるはしをがちりと鉋脈ほに掘り当てたような気がしたので。なお繰り返かえしていうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発けいはつされた時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上しあげる訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰つ

た後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰つて来た時の方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走する義務がさつそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないので、私立学校も一軒稼ぎました。その上私は神経衰弱に罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載せなければならぬ仕儀に陥りました。いろいろの事情で、私は私の企てた事業を半途で中止してしまいました。私の著わした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸です。しかも畸形児の亡骸です。あるいは立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廃墟のようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然として

つづいていきます。吾年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終りましたけれども、その時確かに握った自己が主で、他は賓ひんであるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に立つて、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かげかも知れません。

以上はただ私の経験だけをぎつとお話したのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心ろうぼしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実社界に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私

の一度経過した煩悶はんもん（たとい種類は違つても）を繰返くりかえしがちなものじゃなからうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくつても突き抜ける訳にも行かず、何か掴つかみたくつても薬缶頭やかんあたまを掴むようにつるつるして焦燥じれつたくなつたりする人が多分あるだろうと思うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持つている方は例外であり、また他ひとの後に従つて、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとはけつして申しませんが、（自己に安心と自信がしつかり附随ふずいしているならば、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくつてはいけないでしょう。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかつたなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまごまごしていなければならぬからで

す。私のこの点を力説するのは全くそのために、何も私を模範もはんになさいという意味ではけつしてないのです。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚があれば、あなた方から見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんごうの損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身けいりがそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ径路けいりがあなたがたの模範になるとはけつして思つてはいないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶はんもんがあなたがたの場合にもしばしば起るに違いないと私は鑑定かんていしているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当るまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事

としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしよう。容易に打ち壊こわされない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡もたげて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧もやか靄もやのためめに懊惱おなうしていられる方があるならば、どんな犠牲ぎせいを払はらつても、ああここだという掘当ほりあてるところまで行つたらよろしかろうと思ふのです。必ずしも国家のためばかりだからというのではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あなたがた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思ふから申上げるのです。もし私の通つたような

道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこだわりがあるなら、それを踏潰ふみつぶすまで進まなければ駄目ですよ。——もつとも進んだってどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたがたに強いる気はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるかも知れないと思うと黙だまっていられなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹底てつていしない、ああでもありこうでもあるというような海鼠なまこのような精神いだを抱いだいてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知らんと思うからいのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越こしているとおっしゃれば、それも結構であります。願ねがわくは通り越こしてありたいと私は祈いのるのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せ

なかつたのです。その苦痛は無論鈍痛どんつうではありませんでしたが、年々歳々さいさい感ずる痛いたみには相違なかつたのであります。だからもし私のような病気に罹つた人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇猛ゆうもうにお進みにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があつたのだという事実をご発見になつて、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げるのです。

今まで申し上げた事はこの講演の第一篇ぺんに相当するものです。私はこれからその第二篇に移ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間から見倣みなされております。そうしてそれがおそらく事実なのでしょう。もし私の推察通り大した貧民はここへ来ないで、むしろ上流社会の子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがた

に附随してくるもののうちで第一番に挙げなければならぬのは権力であります。換言かんげんすると、あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立った時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかという、あなた方のもって生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけてだんだん前方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれの安住の地位があつたと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、しっくり合った時に、始めて云い得るのです。

これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味ぎんみ

してみると、権力とは先刻さつきお話しした自分の個性を他人の頭の上に無理矢理にお押しつける道具なのです。道具だと断然云い切つてゐるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上に誘惑ゆうわくの道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏びんぼう人より余計に、他人の上に押し被かぶせるとか、または他人をその方面に誘おびき寄せるとかいう点において、大變便宜べんぎな道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようである、その実非常に危険なのです。先刻申した個性はおもに学問とか文芸とか趣味しゆみとかについて自己の落ちつくべき所まで行つて始めて発展するよ

うにお話し致したのですが、実をいうとその応用ははなはだ広いもので、単に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、弟の方は家に引込んで書物などを読む事が好きなのに引き易えて、兄はまた釣道楽に憂身をやつしているのがあります。するとこの兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠っているのを非常に忌まわしいもののように考えるのです。ひっきょう必竟は釣をしないからああいう風に厭世的になるのだと合点して、むやみに弟を釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でたまらないのだけれども、兄が高圧的に釣竿を担がしたり、魚籃を提げさせたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を瞑ってくつついて行って、気味の悪い鮒などを釣つていやいや帰ってくるのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直ったかという、けっしてそうではない、ます

ますこの釣というものに対して反抗心を起してくるようになり
ます。つまり釣と兄の性質とはぴたりと合つてその間に何の隙
間もないのでしようが、それはいわゆる兄の個性で、弟とはま
るで交渉こうしょうがないのです。これはもとより金力の例ではありませ
ん、権力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を圧迫あつぱく
して無理に魚を釣らせるのですから。もつともある場合には、
——例えば授業を受ける時とか、兵隊になつた時とか、また寄
宿舎でも軍隊生活を主位におくとか——すべてそう云つた場合
には多少この高圧的手段は免まぬかれますまい。しかし私はおもに
あなたがたが一本立いっぽんだちになつて世間へ出た時の事を云っているの
だからそのつもりで聴いて下さらなくては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思つた事、好きな事、自分
と性の合う事、幸にそこにぶつかつて自分の個性を發展させて

行くうちには、自他の区別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間ひに引き摺ずり込んでやろうという気になる。その時権力があると前云った兄弟のような変な関係が出来上るし、また金力があると、それをふりまいて、他ひとを自分のようなものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に気に入るように変化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個性が発展できるような場所に尻しんを落ちつけべく、自分とぴたりと合った仕事を発見するまで邁進まいしんしなければ一生の不幸である。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るようには、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向けいこうを尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それ

が必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪けしからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もつとも複雑な分子の寄つて出来上つた善悪とか邪正じやせいとかいう問題になると、少々込み入つた解剖かいぼうの力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の關係して来ない場合もしくは關係しても面倒めんどうでない場合には、自分が他ひとから自由を享有きやうゆうしている限り、他にも同程度の自由を与えて、同等に取り扱あつかわなければならん事と信ずるよりほかに仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという特徴ふちように使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を云いながら、他人の自我に至つては毫も認め

ていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己おのれの個性を勝手に發展するのを、相当の理由なくして妨害ぼうがいしてはならないのであります。私はなぜここに妨害ぼうがいという字を使うかというのと、あなたがたは正しく妨害し得る地位に将来立つ人が多いからです。あなたがたのうちには権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさんあるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるうはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなた方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事を静せい肅じゆくに聴きいていただく権利を保留する以上、私の方でもあな

た方を静粛にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思ひます。よし平凡へいほんな講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもつていなければならんはずのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしなくてはならない、とこう云おうとすれば云われない事もないでしょうが、それは上面うわつらの礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わば因襲いんしゅうといったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。しかし叱りつ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折つて教えてくれるにきまつています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をももつ

ているはずなのです。先生は規律をただすため、秩序ちつじよを保つために与えられた権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務もつく尽さなければ、教師の職を勤め終おほせる訳に行きません。

金力についても同じ事であります。私の考かんがえによると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しするところになります。金銭というものは至極重宝なもので、何へでも自由自在ゆうざうに融通が利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲もうけたとすると、その十万円で家屋を立てる事もできるし、書籍しよせきを買う事もできるし、または花柳かりゆう社界を賑にぎわす事もできるし、つまりどんな形にでも変つて行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのだから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふ

りまいて、人間の徳義心を買ひ占める、すなわちその人の魂をたましい墮落だらくさせる道具とするのです。相場で儲けた金もうが徳義的倫理的りんりてきに大きな威力をもつて働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云わなければならぬかと思われます。思われるのですけれども、実際その通りに金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもつて、それを道義上害のないように使いこなすよりほかに、人心の腐敗ふはいを防ぐ道はなくなつてしまふのです。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならぬといいたくなります。自分は今これだけの富の所有者であるが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ用いればああいう影響えいきようがあると呑み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に依じて、責任をもつてわが富を所置しなければ、世

の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨をかい摘んでみると、第一に自己の個性の發展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならぬという事。第三に自己の金力を示そうと願うならば、それに伴う責任を重じなければならぬという事。つまりこの三カ条に帰着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を發展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍云い換えると、この三者を自由に

享^うけ樂しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起つて来るといふのです。もし人格のないものがむやみに個性を發展しようとする、他^{ひと}を妨害する、権力を用いようとすると、濫^{らん}用^{よう}に流れる、金力を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらす。ずいぶん危険な現象を呈^{てい}するに至るのです。そうしてこの三つのは、あなたがたが将来において最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人格のある立派な人間になつておかなくてはいけないだらうと思ひます。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り英吉利^{イギリス}という国は大変自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調つた国はありません。実をいうと私は英吉利を好かないのです。嫌^{きら}いではあるが事実だから仕

方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはとうてい比較ひかくにもなりません。しかし彼らはただ自由なのではありません。自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するよう、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきつと義務という観念が伴っています。England expects every man to do his duty といった有名なネルソンの言葉はけっして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して発達して来た深い根柢こんていをもった思想ちがいに違ちがないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけっして干渉かんしょうがましい事をしません。黙もくつて放はなつておくのです。その代り示威運動をやる方でもちゃんと心得こころえていて、むやみに

政府の迷惑めいわくになるような乱暴は働かないのです。近頃女権拡張論者と云つたようなものがむやみに狼藉ろうぜきをするように新聞などに見えています。あれはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁よめに行かれないとか、職業が見つからないとか、または昔から養成された、女を尊敬するという気風につけ込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではなようです。名画を破る、監獄かんごくで断食だんじきして獄丁ごくていを困らせる、議会のベンチへ身体からだを縛りしばつけておいて、わざわざ騒々そうぞうしく叫び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあどうい理由にしても変則らしい気がします。一般の英国氣質というものは、今お話しした通り義

務の観念を離れない程度において自由を愛しているようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持つていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由はけっして社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排斥はいせきされ踏み潰つぶされるにきまつてゐるからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望するものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願つてやまないのであります。こういう意味において、私は個人主義だと公言して憚はばらないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があつてはいけません。ことにあなたがたのようなお若い人に対して誤解を吹き込こんで私がおすみませんから、その辺はよくご注意を願つておきます。時

間が逼っているからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先刻お話しした個性の發展上極めて必要なものであつて、その個性の發展がまたあなたがたの幸福に非常な關係を及ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても差支ないくらいに自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです。金力権力の点においてもその通りで、俺の好かないやつだから畳んでしまえとか、気に喰わない者だからやつつけてしまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用したらどうでしょう。人間の個性はそれで全く破壊されると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云つて、警視總監が巡查に私の家を取り

巻かせたらどんなものでしょう。警視總監にそれだけの権力はあるかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないのであります。または三井とか岩崎とかいう豪商（ごうしやう）が、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使（めしつかい）を買収して事ごとに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけつしてそんな無法を働らく気にはなれないのであります。

こうした弊害（へいがい）はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとするわがままにほかならるのであります。だから個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、けつして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないのです、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私

の解釈なのですから、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もつと解りやすく云えば、党派心がなくつて理非がある主義なのです。朋党ほうとうを結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動もうどうしないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋さびしさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄ぶんげいらんを担任していた頃、だれであつたか、三宅雪嶺みやけせつれいさんの悪口を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたつた二三行あつたのです。出たのはいつごろでしたか、私

は担任者であつたけれども病氣をしたからあるいはその病氣中
かも知れず、または病氣中でなくつて、私が出して好いと認定し
たのかも知れませんが。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載つ
たのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私
の所へ直接にはかけ合わなかつたけれども、当時私の下働きを
していた男に取消を申し込んで来ました。それが本人からでは
ないので。雪嶺さんの子分——子分というとは何か博奕打の
ようでおかしいが、——まあ同人といつたようなものでしよう、
どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもつ
ともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありません
か。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないので
す。しかもそうした取消を申し込んだ「日本及び日本人」の一部
では毎号私の悪口を書いている人があるのだからなおのこと人

を驚ろかせるのです。私は直接談判はしませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な心持こころもちがしました。というのは、私の方は個人主義でやっているのに反して、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当時私は私の作物をわらく評したもののさえ、自分の担任している文芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人なるものが、一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったのを、驚ろきもしました、また変にも感じました。失礼ながら時代後れだとも思いました。封建時代ほうけんの人間の団隊のようにも考えました。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを脱却だつぎやくする訳に行かなかつたのです。私は意見の相違はいかに親しい間柄あいだがらでもどうする事もできないと思っていましたから、私の家に入出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧よくあつを加えるよう

な事は、他に重大な理由のない限り、けつしてやった事がないのです。私は他の存在ひとをそれほどに認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感じずるような事があつても、けつして助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しきです。個人主義は人を目標として向背こうはいを決する前に、まず是非を明らかに、去就を定めるのだから、ある場合にはたった一人ぼっちになつて、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。楨まきざつぼう雑木ざつぼうでも束たばになつていれば心丈夫こころじょうぶですから。

それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、何だか個人主義というところと国家主義の反対で、それを打ち壊すように取られますが、そんな理窟りくつの立たない漫然まんぜんとしたものではないのです。いったい何々主義という事は私のあ

まり好まないところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にいろいろの事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしまたそう考えています。しかも個人主義なるものを蹂躪じゅうりんしなければ国家が亡びほろぶような事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿気たはずはけつしてありようがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の基礎きそとなるべき個人主義は個人の自由がその内容になつてゐるには相違ありませんが、各人の享有きやうゆうするその自由というものは国家の安危に従つて、寒暖計のように上つたり下つたりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から

出る理論と云った方が好いかも知れませんが、つまり自然の状態がそうなつて来るのです。国家が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平たいへいの時には個人の自由が膨脹ぼうちようして来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、疝違かんちがいをしてただむやみに個性の発展ばかりめがけている人はないはずです。私のいう個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾ずきんが必要だと云つて、用もないのに窮屈きうくつがる人に対する忠告も含まれていると考へて下さい。また例になりますが、昔し私が高等学校にいた時分、ある会を創設したものがありません。その名も主意くわいも詳しい事は忘れてしまいましたが、何しろそれは国家主義を標榜ひょうぼうしたやかましい会でした。もちろん悪い会でも何でもありません。当時の校長の木下広次さんなどは大分肩を入れてい

た様子でした。その会員はみんな胸にめだるめだるを下げていました。私はめだるめだるだけはご免蒙めんこうむりましたが、それでも会員にはされたのです。無論発起人でないから、ずいぶん異存もあつたのですが、まあ入つても差支なからうという主意から入会しました。ところがその発会式が広い講堂で行なわれた時に、何かの機はずみでしたらう、一人の会員が壇上に立つて演説めいた事をやりました。ところが会員ではあつたけれども私の意見には大分反対のところもあつたので、私はその前ずいぶんその会の主意を攻撃していたように記憶しています。しかるにいよいよ発会式となつて、今申した男の演説を聴いてみると、全く私の説の反駁はんぱくに過ぎないので。故意だか偶然だか解りませんけれども勢い私はそれに対して答弁の必要が出て来ました。私は仕方なしに、その人のあとから演壇に上りました。当時の私の態度なり行儀なりは

はなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う事だけは云つて退のけました。ではその時何と云つたかとお尋ねになるかも知れませんが、それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云つてあたかも国家に取りつかれたような真似はとうてい我々にできる話でない。常じょう住じゅう坐ざ臥が国家の事以外を考えてならないという人はあるかも知れないが、そう間断なく一つ事を考えている人は事実あり得ない。豆とう腐ふ屋が豆腐を売つてあるくのは、けつして国家のために売つて歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあろうともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になつてゐるかも知れない。これと同じ事で、今日の午ひるに私は飯ぼいを三杯たべた、晩にはそれを四

杯に殖ふやしたというのも必ずしも国家のために増減したのではない。正直に云えば胃の具合できめたのである。しかしこれらも間接のまた間接に云えば天下に影響しないとは限らない、否みかた観方によつては世界の大勢に幾分いくぶんか関係していても限らない。しかしながら肝心かんじんの当人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。国家主義を奨励しょうれいするのはいくらしても差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとくに装よそおうのは偽りである。——私の答弁はざつとこんなものでありました。

いつたい国家というものが危くなれば誰だつて国家の安否を考えないものは一人もない。国が強く戦争の憂うれいが少なく、そうして他から犯される憂がなければないほど、国家的観念は少な

くなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入つてくるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないので。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがっていつどんな事が起つてくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は国家の事を考えていなければならぬのです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡めつぼうの憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう国家国家と騒ぎ廻る必要はないはずです。火事の起らない先に火事装束しょうぞくをつけて窮屈な思いをしながら、町内中駈かけ歩くのと一般であります。必竟ひじやうずるにこういう事は実際程度問題で、いよいよ戦争が起つた時とか、危急存亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてはられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自由を束縛そくばくし個人の活動を切りつめ

ても、国家のために尽すようになるのは天然自然と云つていいくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺し合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この点についても、もつと詳しく申し上げたいのですけれども時間が無いからこのくらいにして切り上げておきます。ただもう一つご注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺さぎをやる、ごまかしをやる、ペテンにかける、めちやくちやなものであります。だから国家を標準とする以上、国家を一団と見る以上、よほど低級な道德に甘んじて平氣でいなければならぬのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなつ

て来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩へいおんな時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせつかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思うからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、私には分りませんが、もし私の意味に不明のところがあるとするれば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろうと思えます。で私の云うところに、もし曖昧あいまいの点があるなら、好い加減にきめないで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつでも説明するつもりであります

から。またそうした手数を尽さないでも、私の本意が充分じゅうぶんご会
得になったなら、私の満足はこれに越した事はありません。あ
まり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成 4）年 1 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集 10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 7 月 26 日第 1 刷発行

入力：真先芳秋

校正：かとうかおり

1998 年 11 月 19 日公開

2008 年 10 月 5 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。